



# 羅針盤

2017年度 第6号  
都立豊多摩高等学校  
進路図書部

2017（平成29）年6月28日発行

## 志望校のアドミッションポリシーは？

### ■アドミッションポリシーとは？

どんな高校生の入学を望むか、大学が入学希望者（＝受験生）に示した方針です。志望校を絞っている人、その大学のアドミッションポリシーを読みましたか？ 自分はあてはまりますか？

各大学のサイト→受験生向けページや大学案内冊子に載っています。たとえば、成蹊大学理工学部物質生命理工学科では…(1) 高等学校までに学んだ幅広い知識を自らのものとして本質的に理解し、かつ以下の(2)(3)いずれかを強く志向する人 (2) 物質や生命の本質をさらに深く追究したい、あるいは有用新規物質の創成を試みたいと思う人 (3) 人の命を尊び、生活の質を向上させ、人類が永く繁栄するために、自らの知識や智慧を役立てたいと思う人

同大文学部英米文学科では…(1) イギリス文学、アメリカ文学、英米およびその他の英語圏における歴史や文化、英語学、英語教育や通訳・翻訳・異文化コミュニケーションなどの分野に強い関心を持ち、それらの分野を探究しようとする人 (2) 英語読解力を含む英語による実践的コミュニケーション能力を持つ人 (3) 文献分析能力を持ち、自分の考えを口頭や文章で明晰に表現する力のある人 (4) 国際社会の動向に幅広い知識と強い関心を持っている人

### ■アドミッションポリシーを読み解くと

以上の例では、文理で学科は違っても、高校までの教科書の知識・能力、追究・探究したい意欲、人類や国際社会まで見通せる視野、そうした力がある人を求めています。入試突破を第一にしてきた人ではありません。受験勉強は、高校までの学習の基礎を固めて、それを迷いなく応用できる力を伸ばすことでしょう。授業で「ここが基本！」と示された点を確実に身に付け、与えられた問題集でいろいろな応用力をつけていくことにしましょう。

しかしながら大学はさらに「探究心」と「視野」を求めています。こうなると、教科書・問題集の世界ではなく、専攻する分野を高校生なりに知っているか、自分の能力をどう発揮させるか、社会の動きを知っているか、という話になります。専攻分野を一般向けに紹介した本を読んだり、新聞（報道機関のサイト）の第一面や社説欄を読んで社会を知ったりするのを、夏休みを機に始めてみてはいかがでしょうか。どんな本があるかは、先生がたにたずねるのも手です。

ではさっそく私・理科の三池田から。

◆理系で物理系の人へ☆川口淳一郎監修「小惑星探査機「はやぶさ」の超技術プロジェクト」  
（講談社発行、ブルーバックス）

◆生物系の人へ☆宮田隆著「分子からみた生物進化～DNAが明かす生物の歴史」（講談社発行、ブルーバックス）☆鷲谷いづみ著「サクラソウの目」－繁殖と保全の生態学－（地人書館発行）

◆化学系の人へ☆東北大学金属材料研究所編著「金属材料の最前線」（講談社発行、ブルーバックス）

どの本も感激しました。近隣の市区立図書館にも備わっているでしょう。

（三池田 修）

## 『一瞬の夏』

表題に示したのは、沢木耕太郎という作家が書いたスポーツ・ノンフィクション小説のタイトルである。競技を引退して久しい主人公の内藤が、再び世界を目指して挑戦していく道程を描いた物語だ。物語の終幕近く、内藤は浮上するためのチャンスとなる大きな試合に臨もうとしている。しかし生活のためにナイトクラブでの仕事をこなさなければならず、体重やコンディションの調整が全くできていない。老トレーナーのエディはそんな主人公の様子を見て、全てを懸けていない人間が勝利などつかめるはずがない、と絶望にうちひしがれる。そして作者は二人を見ながら、この一年間の挑戦は一夏の幻のようなものだったのか、と思い虚無感に襲われる…。

『「一あんなに、汗が出るはずないよ。(水分を)出して、また夜になって入れてるのね。そうに違いないよ。駄目なボーイ…」エディの声には、憤りと諦めがないまぜになったような悲しげな響きがあった。エディは絶望したのだ。夜の仕事を崩れていく内藤の身体に絶望したのだ。恐らくエディは、自分の最後の夢が朽ちていくのを見たくなかったのだ。私はソファに座り、向こうの窓の外をぼんやりと眺めていた。不意に目の前を赤い電車がよぎり、一瞬にして通り過ぎると、そこには一年前と同じただ暑いだけの夏の午後があった。』

試合の直前になっても、内藤はこう言う。『「クラブの社長に言われたんだ。勝つに越したことはないけれど、お前の人生にとっては、この試合は負けた方がいいかもしれないって。何を言っているんだと思ったけど、今考えると、案外そうかもしれないなって気もするんだ。』内藤には家庭があり、生まれたばかりの子供がいる。それを思うと、危険な競技者としての活動には幕を引き、安定した収入のある道を選ぶのがいいかもしれない、と内藤は言っているのだ。子供を持つということは、人生の主語が複数形になるということの意味しており、内藤の気持ちには共感できる部分もある。しかし、これはやはり自分に逃げ道を用意している、と言わざるを得ない。内藤は、世界王者を複数育てた経験を持つエディをして「自分が見てきた中で、最高の素質を持つ選手」だと言わしめる程の才能を秘めているが、勝利に向かうための決定的な努力や意志を固めることができない選手なのだ。家庭や子供のために、と思うのなら、どうしてそれを試合に勝つための動機づけに変え、課題と向き合うことができなかつたのだろう。そして、課題と向き合うことをしないのならば、どうして家族を第一に考え、選手としての道を退くという選択をしなかつたのか。**何事においても、それをやらない理由などいくらでも出てくるのだ。動かない理由や、上手くないかの言い訳というものは、無限に用意することができる。**これは豊多摩生の皆さんにも言えることだが、学校や授業の評価アンケートに目を通すと、「学校のシステムが悪い」「先生の教え方が悪い」などの、自分ができない理由を他者に見い出そうとするコメントを見ることがある。これは一見自分にとって楽なようだが、実は違う。自己の課題と向き合うことから逃避している人間には、いつまでも本質的な解決や成長が訪れることはない。そして、そういう姿勢を持ったまま大人になると、改善できる可能性は極端に少なくなっていく。そうして年を重ねてしまった人間は、死ぬまで「自分の人生」を保留し続けるのだろう。いつまでも他人の課題の中で生き、自己と向き合うことなく人生を終えることになるのだろう。

松本大洋が書いた卓球漫画『ピンポン』にも同様に、天賦の才能を持つがレジリエンス（精神的回復力）が乏しく、敗北の挫折から立ち直れない主人公が登場する。彼に対し、幼馴染のライバルが復帰を促す言葉は次の通りだ。『「お前は浅瀬でもがいてるだけだ。沖にすら出ちゃいない。血ヘド吐くまで走りこめ。血便出すまで素振りしろ。今より少しは楽になるぞ、ヒーロー。』

夏という短い季節をどのように過ごすのかは、あくまでも自分次第だ。特に受験生の皆さんが、陽炎のような儚い幻では終わらない「一瞬の夏」を過ごせることを願う。(遠藤 圭)